

研究会報

No. 7

(主体性論の総括)

1994年7月

90年代の共産主義運動を考える研究会

目 次

小林一喜『黒田寛一論』をめぐって

主体性論からみた新左翼	志摩玲介 [共産主義者同盟 (プロレタリア戦旗編集委員会)]	3
小林一喜『黒田寛一論』読書メモ	津村 洋 [『国際主義』編集会議 (青年共産主義者同盟再編)]	8
黒田寛一論	早見慶子	12
閑話休題 活動とウソのつき方	早見慶子	16
唯物史観と主体性論・上部構造論	旭 凡太郎 [『プロレタリア通信』編集委員会]	20
長崎浩『時代経験と思想 黒田寛一の「技術論」』レジュメ	畑中文治	44

主体性論からみた新左翼

— 小林一喜『黒田寛一論』へのコメント

志摩玲介 (共産同・プロ戦編集委)

序 なぜ主体性論をとりあげるのか？

① 『黒田寛一論』(1972年、田畑書店)の著者・小林一喜(1935-)は、津田道夫らの現状分析研究会に属していたころ本書を執筆した。ほかに『吉本隆明論』(1968年、増補改訂70年、田畑書店)、『思想における現代とは何か』(1991年、同友館)など、思想面での批評活動をつづけているようである。そこに共通するモチーフは、60年安保闘争の「挫折」体験にふまえた近代主義の超克といえよう。

② 本書は、副題のとおり「戦後主体性論への考察」をこころみたものである。本書、ならびに本書の姉妹篇『吉本隆明論』が、どちらも絶版なのはざんねんだ。戦後三大論争のひとつ、主体性論争は、直接的には戦前の日本共産党員の大量転向への反省であったとともに、のちに日本新左翼の(ことなつた位相から今日の日共系論者にも)哲学的基礎づけに重要な素材を提供するものとなつた。

③ 主体性論はおもに革共同両派の思想的支柱になってきたためか、第二次ブントはこれを十分、組織的に検討してこなかつた。「だから党建設に敗北した」とみるのは一面的にしか正しくない。党的求心力と表裏一体の排外的政治展開(「赤色」テロリズム)など、革共同の思想水準がもたらした否定的現実が明白ないま、主体性論を批判的に考察する歴史的条件がととのつたといえよう。

I 黒田主体性論への批判点

④ 梅本克己による「空隙」論の問題提起、理想主義的な実践がひきずる当為と現実(ゾルレンとザイン)の断絶をいかに克服すべきか、という問いかけにたいし、黒田寛一は、梯明秀の「物質的主体の自覚」論、および武谷三男の「客観的法則性の意識的適用」論のちみつきをもつて回答をあたえようとした。それは、小林によ

れば、科学信仰にもとづく啓蒙主義としての前期近代主義をのりこえ、先験的当為と実在世界とを合致させようとする普遍的自我を理想化した中期近代主義を体現するものではあったが、かかる主体性をも相対化する自我主義的な吉本隆明ら後期近代主義を变革する力をもちえない水準にある。もっともな批判といえよう。

⑤ ところで、黒田主体性論の具体的内容は、たんてきにいて、プロレタリア諸個人が、労働力商品としての自己を資本の「根源的〔本源的〕蓄積過程」にさかのぼって反省し、根底に物質的自覚をはらんだ階級的自覚を獲得する、というものであった（『プロレタリアの人間の論理』ほか）。その経済学的基礎づけへの批判をひとまずおくとしても、主として梯経済哲学に依拠した黒田の自覚論は、ザインとゾルレンの思弁的な統一のなかで実存的な充足をえていく体系を意味するものだ、とみてさしつかえない。

⑥ なるほど、黒田は存在論の領域にふみこんではいるが、「純粹思惟の自覚の底」に不可視な「歴史的自然」（対象化された自然ではない）を内在化したと称し、物質的自覚の無限可能性、いいかえれば「絶対的真理」（仮象実在？）への到達可能性を根拠づけ、この認識論的な自己満足をそのまま存在論的な自己充実としても感受することによって安心立命している、といわねばならない。この思弁は「行為的直観」を媒介に実在世界と唯物論的に連絡させられるわけであるが、じつは、行為＝実践そのものは思想的に価値づけられず直観－反省の手段におとしめられ、「実践的唯物論」は名ばかりのものとなる。

だからこそ、「無底なる自己」（『ヘーゲルとマルクス』p. 381）、いわば無限に非合理的な実存空間に着目しながらも、身体的な実践哲学、表現行為をとおした存在の充実との出会いに昇華しきれなかったといえよう。それは、有限な認識のなかに身をおくことに不安を感じる（裏返しの不可知論的心理）世代類型の象徴的態度といえるかもしれない。その意味で、梅本の問いから中途逃避しているにもかかわらず、無限認識の場としての党の物神化が不可避となる。

II 第二次ブントの階級形成論について

⑦ 第二次ブントは、革共同のインテリ主義に反対し前衛党物神を拒否する正当性を保持したが、他面で労働者階級物神に傾斜する弱点をも同時にかかえていたといえよう。むろん、藤本進治『革命の哲学』（1964年、青木書店）などに学んで、プロレタリアートにおける私の商品所有者的性格と階級的組織性との内的矛盾を設定

しはした。しかし、その矛盾の展開と止揚の過程が、意識や認識や思想の自己対象化作用よりも、運動や実践による自然成長的な意識変革にかたよって理解されていたきらいがあり、いきおい「素朴」実践主義的、予定調和的な階級形成が想定されていたようにおもわれる。さらに、党的主体じしんの「空隙」を深めて組織分解をよぎなくされたのではなかったろうか。

⑧ 藤本とともに、第二次ブントの階級形成論にいまひとつの理論的根拠を提供した廣松渉『マルクス主義の成立過程』（1968年、増補84年、至誠堂）における、「プロレタリアートにとっては、現代社会のザイン認識は直ちにプロレタリアの実践の契機となるのであって、『ゾレン』と分裂しはしない」（p. 77）なる立言にも問題があった。ザインとゾルレンの分裂しない神のような階級存在、自己疎外されざる「理想」的なプロレタリアート像の措定、これでは主体性論に反対した当時の日共系論者と五十歩百歩であり、遺憾ながら主体的唯物論者の足もとにすら到達していない。とはいえ、その後の廣松が、差異ある諸個人を「間主体的」に関係づける「共同主観性」論を提起したことは、その思想論的な深化いかんでは『成立過程』の限界を訂正する可能性を秘めていたとも解釈できよう。ただし、そのためには、市民社会（ゲゼルシャフト的な交通連関）論に基礎づけられることが必要ではあるが。

⑨ 対象化される以前の（感情や欲求などをもふくむ）意識内容として実存し、イデオロギーから区別される思想ジャンルにたいし、第二次ブントが、共同幻想論などの契機はありながらも、革命的な固有の意味をみだせなかった理由はいくつかかんがえられる。第一に、経済的諸関係に還元するかたちでしか人間をみない観点が存在した。マルクス主義唯物論は、「〔人間は〕社会的諸関係の総体である」（『フォイエルバッハにかんするテーゼ』全集3 p. 4）「人間の社会的存在がその意識を規定する」（『経済学批判・序言』岩波 p. 13）という、それじたいは機械的唯物論風のテーゼを包摂する。だが一方、人間の「意識とは、意識する存在* das bewußte Sein 以外のものではけっしてありえない」（『ドイツ・イデオロギー』合同 p. 40, 河出 p. 29）ことを強調するのであって、これをくみこんで「社会的諸関係」「社会的存在」を理解すべきであった。

第二に、資本主義批判としての労働疎外論に部分的にはらまれている人間疎外論への反発があった。「類的存在」「類的本質」の名のもとに〈疎外されない人間〉像をえがくのはあまりに抽象的であるが、この像は数ある人間類型のなかの性善説タイプとみなして、とりあえず処理可能であろう。第三に、⑦項でふれたような階級形成論にたって認識論主義を否定する観点があったかもしれない。この観点は予

定調和的な階級形成を存在過程化している点に無理があった。以上の結果、第二次ブントは、自我⇄他我の思想的交通関係を通じて実存的空隙のナイーブな矛盾を揚棄していく作業に政治論的・組織論的には無自覚なまま、「コミューン」「世界革命戦争」などのキャッチフレーズに理念的に拝跪したのだった。伝統的共同体の紐帯としての「義理、人情」や、俗にいう裏ワザ、腹芸などへの依存から脱却をはかりつつ、自我⇄他我の矛盾にふまえた現代民主主義のエートスを創造しえないまま……。

* 「意識された存在」という翻訳の反映論的欠陥は、中野徹三『マルクス主義の現代的探究』青木書店、1979年、pp.167-9 での的確に批判されている。

III 「近代の超克」とマルクス主義

⑩ 現代の（かつても？）労働者階級が日々、対面せざるをえない内面の自己分裂と葛藤、自己相対化、これら意識の事実の存在を認め、かかる内的自己矛盾に則した思想変革の方向性をあきらかにしていくうえで、小林の思想方法論、すなわち、近代主義的思惟における前期／中期／後期の三遷過程説、ならびに「存在論的考察の認識論的止揚」の提言は、いずれも基本的に有効であるとかんがえる。とりわけ後者の問題設定は、認識論主義にかたむきがちだったマルクス主義哲学のアキレス腱を、「唯物論か観念論か」といった実りすくない図式にはまることなく、積極的に克服する方途をつきだしている点で貴重なものである。

それは、若きマルクスの考究、「人間の諸感受性、諸情熱などが、……真に存在論的 *ontologisch* 存在 *Wesen*（自然）肯定である」、「私的所有の媒介を通じてはじめて、人間的情熱の存在論的本質は、その総体性においても、またその人間性においても生成する」（『経済学・哲学草稿』岩波 p.178, 国民 p.194）などを想起させる。それらが小林の所論と一致する内容かどうかは検討の必要があるが、認識論-実践論に媒介されるべき〈人間存在のオントロジー（存在論）〉、この重要なテーマをうきぼりにしたのは（H・マルクーゼと）小林の功績といってよいだろう。

⑪ けれども、小林は、後期近代主義の超克を論拠づけるうえで、初期マルクスの思想の断片によりかかりすぎではないのか。マルクスにおけるヘーゲル左派体験＝ニヒリズム体験の表出とされる『経哲草稿』の「充実した無から絶対的な無へ」（岩波 p.110, 国民 p.124）という文言は、景気変動による労働者の窮乏化を表現

したものと読み解くのがすなおであろう。また、かれが引用していない『ミル評注』の「人間の真の共同的存在は、決して〔クロカンのような〕反省によって生ずるのではない。おもうに、それは諸個人の必要とエゴイズムによって、すなわち、かれの定在そのものの活動をとおして直接にうみだされるのである」（『マルクス経済学ノート』未来社 p.96）というのは、エゴイズムになんらかの意味を認めた事実を示唆していると一応はいえる。

しかしながら、これらが記された1840年代における労働者階級の現存は、大衆的な規模で後期近代主義的思想状況を成立させようべくもなかった以上、マルクスの言説には仮説的要素がつきまとっていたはずである。また、これらの草稿全体の公表は1930年代のことだったのだから、社会主義者たちは近現代史と並走しながらマルクスの試論を意識的に検証できたわけでもない。ことに、客観主義的唯物論（前期近代主義）に偏向したロシア・マルクス主義には、マルクスの初期草稿を内容的に消化するだけの知的＝道徳的ヘゲモニーが欠けていた。小林はそれをのりこえたが、初期マルクスを一面やや強引に解釈した点がおしまれる。

⑫ さて、語られてひさしい「西ヨーロッパ近代のたそがれ」、この世紀末テーゼと相関するポストモダン、当初の「反人間（中心）主義」、つまり、自然＝対象の野放図な征服にゆきついた近代西欧出自の啓蒙主義的人間観を自己否定する言説が一巡し、かかる予備作業を踏み台に、新しい歴史的主体の再構想に道をひらきつつある、といえるのでは？ 小林の近著『思想における現代とは何か』は、廣松の静態的な「関係論」（構造主義）と丸山圭三郎の動態的な「生成論」（ポスト構造主義）とをあざやかに対質させた半面、“ポストモダンはヘーゲル左派水準をこえていない”旨の否定的評価が強すぎて、いささかうしろ向きなのではないか？ 歴史的に発展、変化する労働者階級の実存をみつめ、マルクス思想論をその試行性にふまえて現代的に再構成していくべきであろう。

(1994.5.31)

小林一喜『黒田寛一論』読書メモ

津村洋（『国際主義』編集会議）

1. はじめに

以下のレジュメは、93年8月および10月の研究会に提出したものに若干手を加えたものであり、その一部抜粋である。

検討対象は、小林一喜『黒田寛一論』田畑書店1972 である。

この著作は、全体に黒田寛一論というよりも、日本における近代主義とか戦後主体性論批判とかのタイトルのほうがふさわしいような書物である。つまり、黒田寛一の思想よりも、黒田が摂取したところの梅本克己、梯明秀、西田哲学、武谷技術論の検討の方が主となっている。したがって、黒田寛一論としては、はなはだ不満が残る内容である。

参考までに、目次は以下の通り。

序章として

第一章、問題の所在

第二章、倫理的主体性論と梅本克己

1、梅本克己の問題提起

2、「倫理的主体性論」のマルクスの止揚について

3、黒田寛一における梅本哲学の受容と止揚

第三章、物質的主体性論と梯明秀

1、戦後主体性論と蹉跎の軌跡

2、梯明秀における論理構成

3、西田哲学と梯明秀

第四章、武谷技術論と戦後主体性論

1、武谷技術論の登場とその意義

2、技術論における近代主義的呪縛

3、疎外論と技術論

4、武谷技術論と黒田哲学の錯誤

2. 著者の中心的な主張

著者の主張のポイントは以下のようである。

1、「思想における近代主義とは、近代思想の展開過程において開示され、かつ止揚された論理を、あたかも現代的課題を解決しうる論理であるかのごとく、方法論上の無自覚によって現代に適用された思想をいう」（p. 66）。

2、近代思想は、中世の教権中心主義に対して、自我の発見にもとづく人間中心主義、主体性論として登場した。「そこで発見された自我の発現形態の成熟過程として初期・中期・後期とその変遷過程をたどる」（p. 67）。つまり初期（デカルト）、中期（カント～フィヒテ、シェリング～ヘーゲル）、後期（マックス・シュティルナー～ニーチェ～ハイデッガー）に区分される。

3、マルクス主義は、ヘーゲル左派（後期近代思想）体験を媒介に、近代思想総体を止揚した。

4、日本のマルクス主義（正統派マルクス主義）は本質的に初期近代思想を抜け出していない。

5、「『戦後思想』は日本マルクス主義の客観主義に対する緊張関係から、その克服の論理を主体性論的発想に根拠を求めなければならぬ必然性はあった」（p. 261）。

6、「しかし、かかる歴史的条件に対応するための段階的必然性と、思想としてのマルクス主義が到達し、かつ定立した成果を同一視してしまった戦後主体性論には決定的な錯誤があった」（p. 261）。

7、正統派マルクス主義に対抗した戦後思想、主体性論は、積極的な時代的一面をもつが、近代主義を止揚できていない。初期近代思想にたいして後期または中期近代思想を対置している。

8、したがって、主体性論を摂取した黒田寛一は、近代主義の止揚に失敗している。彼は、戦後思想の意義と限界を明確にさせる格好の素材である。

9、「私は『唯物論か観念論か』という設問の構図のなかで、他の思想を裁断するしか能がなかった先達を否定し、『存在論的考察の認識論への止揚』という課題を持論として提起するものである」(p. 90)。

3. 黒田哲学—主体性論について

日本における新左翼潮流は1950年代に形成され、その一方の支柱が黒田寛一を指導者とする革共同であった。新左翼系のなかで先行して形成された潮流だけあって、共産同など他の潮流にいろいろな影響を与えたといえる。

黒田哲学—主体性論は、革共同の党派性をなすものであり、スターリン主義・日本共産党を克服しようとした積極的志向とともに、大きな限界を刻印するものであった。

これにたいする批判点を荒っぽく要約すると以下のようである。

1、黒田哲学—主体性論は、スターリン哲学、受動的な政治意識・経済主義的な即自意識賛美に反発し、階級形成にとって全面的な意識変革が不可欠であるという根拠づけを追求し、失敗した。

2、黒田は、スターリン哲学を「客観主義」と規定・批判し、主体性論を対置することで主観主義に陥った。

3、対象認識は価値判断との統一においてなされる、という認識論がその典型である。だが、対象の外部から恣意的な「価値判断」なるものを持ち込むことなく、全事物(自然・社会)を歴史過程とその連関として(その反映として)捉えなければならぬ。

4、黒田は、エンゲルスの「鏡的反映論」を批判しているが、エンゲルスの狭い反映の理解を前提にしたまま、折衷的体系をつくりあげている。つまり、個別実証的な反映+「思考内部の反映」=「反省」という論理(第一次的反映+二次的反映論)。

5、黒田は、意識・認識がすべて社会的意識であるという唯物論的規定にたつことができず、個別実証主義に対決できていない。

6、また、黒田の客観主義批判は、つねに実践的立場(主体的立場)を対置する構造のなかに、たえず非実践的立場なるものの存在を主張し、自然発生性に迎合・容認する思想となっている。だが、階級社会では社会生活はなんらかの階級的な実践的性格をもたざるをえない。

7、黒田の唯物史観解釈は、自然・社会の相互関係を具体的に考慮することができず、本質—疎外—回復という疎外論的歴史観に陥っている。

[1994/03/04]

黒田寛一論

早見慶子

はじめに

小林氏の経歴は詳しくは知らないが、安保闘争を闘いながらも展望が見いだせず、挫折していったに違いない。彼の文章は全体を通して、失望しながらも自分にとってのマルクス主義とはなんだったのかをとらえ返そうと、思想史を整理し、自らの歴史的総括にしようとする生真面目さがうかがえる。にも関わらず、総括に終わっているため、これからも闘い続けようとする者にとっては、特別の展望を示す方法は語られてはいない。感受性の豊かなインテリが前衛党の現実が理想には程遠く、彼にはいらたたく思えたのだろう。そして、そのインテリのセンスがむしろ主体性論が登場する現実的必要性を理解することを妨害しているように思えてくる。人間とは単純な機械ではないから、目標だけをインプットして自動的に作動しない。そんなにお利口に肉体や頭脳がいいなりににはなってくれないからだ。人はそのとき自己の内部で葛藤し、わかっているけどやりたくないエゴと、社会にとって必要なことだからという理性の闘争をする。主体性論を否定する皆さんは必要であるという認識をすれば自動的に肉体が動くのかもしれないが、私はそうではない。計画的武装闘争を行うことは、逮捕、敵からの暴力、両親の社会的信用の崩壊、そして組織への責任感から絶対逮捕されてはならないという気持ちが複雑に絡み合い、緊張と不安がおしよせて、かなり自分にいきかせないと自己を動員するのは困難である。自己をあおるもの、元気づけるもの、それは認識だけでは不十分である。

1 筆者の問題提起

まず、梅本克己の主体性論を問題にする背景には日本共産党が、スターリン主義を輸入し、階級闘争をあたかも人間の法則かのように曲解し、闘うことが必然であり、進歩的インテリゲンツィアの歩むべき正当な方向かのように展開してきたことに

も根拠がある。労働者が資本家に対し闘争するかどうかは、それぞれの自由意志によるものであり、必然ではなく選択である。それが証拠に共産主義者がかつて考えてきたように歴史はつくられてはいない。にもかかわらず、闘うことを当たり前と思えない人をプチブル呼ばわりする組織に、己の人生をかけるかどうか疑問に思うのはしごく自然なことである。

しかし、日本共産党が唯一の革命党である時代にはそれしかないがゆえに、やりきれない自己の葛藤を主体性論という形でうめていこうとしたのであろう。小林はこれをマルクス主義を理想主義のように理解する梅本の思想的未熟性に原因があるとし、マルクス主義をケルケゴールで乗り越えようとする苦闘を後戻りしているだけで、遅れたものと嘆いている。そして、そのためマルクスの思想はどのような哲学史の中から生じたのかを西洋哲学の近代の流れを追うと同時に、日本の哲学史の流れさえも追っている。たぶん活動に追われて、マルクスを教条的にしか理解しようしないマルクス主義者が多くいる中で、小林のようなインテリゲンツィアはマルクスを軽々しく展開して、内容が薄められていくことがまがでできなかったのだろう。そのせいか、あの当時としたらすぐれた問題意識を表現していると言えるだろう。

しかし、西洋での近代思想にしても、彼の分析の仕方は、マルクス主義者としての限界を有していると言える。デカルト、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルといった流れはマルクスの意識形成過程を追ったものであって、人間の歴史とは関係ないし、それ故、すべての人間にあてはまる論理でもない。例えばデカルトにしても数学や自然科学に言及しているし、その影響はまだ、現代の科学の中で受けていたりする。さらに、カントの人間の意識の変化や直感という内面的問題提起はマルクス主義の中では消滅させられていて、フロイトやユングなどの精神分析学者のほうで継承-発展させられているのが現状である。人間を理解するためにはその精神のデリケートなしくみや意識の状態の変化を分析することもなくてはならない作業である。にも関わらず、そうした分野を取り除いていくことが、あたかも人間の進歩かのような過ちをおかし、人間の環境を整えようとしても、人は豊かになることはできない。資本家対労働者という単純な構造で人間を理解し、不満が生じる原因をすべて資本家の責任にしたてあげてきたのは、権力闘争に力点が置かれてきたことの歴史的結果であろう。

つまり、そのように単純な図式で表現したほうが庶民にはわかりやすい。もっと深いさまざまことを教えていたら、敵に負けてしまう。その格好の方便としてこの構図が利用されてきて、それでも庶民にとっては今、現実がかなり悲惨であったか

ら、革命に期待をかけたのだろう。しかしそれは、その構図の貧弱さがあっても、活動家の正義感と情熱と生命を人々の未来にたくそうとする、献身性があつたからこそ、生き活きとした素晴らしい歴史のひとつコマとして、永遠に語られ続けられる価値あるできごとになったのである。

もちろん、経済学分野での業績や、組織論、哲学と立派なものは一杯あるだろう。しかし、私は今のこの現代に生きているのだから、新しい科学と総合的な人間把握がしたいため、近代の哲学をマルクスに合わせて解釈するのではなく、それぞれの意義を理解した上でまだ尊重する余地はあると思うのである。つまり、小林はマルクスが絶対でその前の哲学者はその下のランキングにされてしまっている。そして私たちはそうしたことを信じこまされてきたのである。現代のつまらぬ、しかも名の売れた評論家よりソクラテスやプラトンの方が人間を知っていたと私は思うし、ヘーゲルなんかはやっぱり尊敬し、彼の書いた詩も心をうつ。もちろんデカルトの生理学などは、とうてい現代で通用するしろものではないし、カントの思考回路は人間を解放するより、混乱させるような内容である。しかし、フロイトやユングにいたっては「キチガイ」として差別され隔離させられてきた人間たちの一部を解放し、自由にしてきたわけである。このような歴史を考えると、マルクスから歴史をとらえるだけでは不十分だと思うのである。

私は精神構造まで踏み込んだ、社会把握がこれまでのさまざまな分析にプラスされなければ、もはや、人が振り返ってくれないのではないかと懸念する。そこはもちろん年代の格差から考えたことで、私が小林の時代だったら彼ほどの文章さえも書けなかったかもしれない。

2 黒田寛一論の疑問点

彼は梅本克己を理想主義と批判し、『われわれにとって共産主義は招来せられるべき状態でもなければ、現実が指向すべき理想でもない。われわれにとってそれは、現状を廃絶しようとする現実の運動である』というドイツ・イデオロギーにかかっている引用をなげかけている。しかし現実を変革する運動にもいろいろある。改良闘争もその一部であるし、企業さえ改革精神は旺盛である。それが、共産主義であるためには、その目指されるべき目標、理想において差異があると言わねばならない。もしその運動の先に理想が存在しないなら、人は闘争する意味を見いだせない。すばらしい世界を信じるから弾圧さえもはねのけられるのである。そして、その理

想はより明確で誰にでもよくわかり、実現する気力のわくものでなければならない。マルクスは実現不可能な夢想としてのユートピアは批判したが、理想は否定していないはずだ。なぜなら、アダム・スミスのヒューマンズ的資本の経済学を批判しているが、資本主義でない世界を想定していなければ、そのような考えは浮かぶはずもないからである。

また、先に述べたように小林自身マルクスを絶対思想のように崇拝しているふしがある。マルクスの思想は観念にとどまっているうちは美しく、知性的で、論理的な見事な響きを保っている。しかし、実際に社会を変革しようとしたとき、思うようにならない現実、理解してくれない大衆にかこまれて人は失望する。ましてや理想的、進歩的であるはずの革命のおこった国々が人々の幸福に寄与していない事実を知れば、ますます苦しくなるだろう。オアシスを信じる砂漠の旅人ではなく、オアシスが幻覚であることに気づいた旅人は苦しいように。このとき、現実にはぶつかり真面目に変革しようとしたものは、主体性論にはいり、諦めたものは、総括だけでもしっかりしようとするのである。

認識論でやっていけると考えるのは、人間の感性や立場、世界観の一致ができていることを前提としている。しかし、人間は様々に存在し、かつ多様化した生産様式、消費文明に生きているため、その価値観の前提は違いすぎる。すべての人にとってマルクス主義は絶対ではないし、いくら理想的であろうとしても、ストレスがたまればイライラし、疲れていけば頭がボーッとするのが現実の人間である。ここでは目標を遂行するための自己コントロールが問われ、主体性論の登場する根拠が存在する。人間の頭脳にイメージできないものを人間は創造することはできない。その意味において人は観念的であり、環境に対する主導性を有するのである。この辺のところが多量にエンゲルス以降受動的な存在かのように強調されているふしがある。確かに多く人は習慣のとりこになっており、日常性を打破できないが故に、その人間性を変革することより、利用する存在かのように位置付けられたのは問題であると思う。

組織エゴにすり替えられてしまう主体性論ではなく、人間の精神構造を明確にしたなにかしらの自己変革を問題にする思想を私は必要だと考える。人間性を問う—それは科学である。

活動とウソのつき方

早見慶子

昔からウソは泥棒の始まりだとか言われ、ウソをつく人間は嫌われてきたようである。日本古来から伝わる仏教の世界での厳しい戒律のなかにも「ウソをつかない」という項目がもうけられているそうだ。ところが人間の世界はウソにまみれている。法律違反などは日常的習わしかのように、そこらじゅうにうごめいている。そして、ウソをつくのが、うまいほど成功しているから、どうしようもない話である。たぶんそれは、大資本家から出発して、男と女のウソ、エイプリールフールのウソまで、人はウソをつくことを趣味としている。にもかかわらず、ウソつきな人間ほど、自分は正直ものだと言い張ったりするから、いかに人間の世界が欺瞞にあふれているか想像がつくだろう。

とりわけ私たちの得意とする政治の世界はウソとハッタリの巧妙さを競う、虚構の世界を構築してきたのではないだろうか。この業界でウソのつけない善良な人々は、なかなか積極的な活動は担えきれない。逆に私のようにウソをつくことを生活の楽しみにしてしまっているような人間にとっては、その個性をいかしてきたのかもしれない。

まず、闘争のために緊急に職場を休む時、どうするか？ 一般的に使われる口実は病気である。冠婚葬祭は、かなり人気の高いランキングに属するが、頻繁に使っているとボロが出るので気をつけたほうがいい。自分の兄弟の人数を把握しておかないと、「君のお兄さんはこの間も結婚したんじゃない？ もう一人いたの？ 履歴書にはそんなこと書いてなかったけれどな」とウソを見破られてしまう。そして、こうなった時が勝負の見せどころだ。「えっ、そうだったかしら。う～ん」と正直な人はつまってしまう。実際にウソをつこうとすると、手に脂汗がにじみでて、震えてくる人は結構いる。

そんな時、ウソをつくのを楽しみにしている人間はどうであろうか。このようにチェックをいれてくれる上司こそ、おもしろいゲームの相手に変身してしまう。適当なウソを言って、単純に騙されてしまう上司より、さらにワンランク上のウソつき上手になるチャンスである。この勘ぐりを喜んで受け止め、「よく、わかってくれましたね。兄はどうも甲斐性がなくて、結婚した当初から、朝帰りしたりしてた

もんで、にげられちゃったんですよ。今度こそうまくいけば、と思っているんですが、いいアドバイスないですか？」とさりげなくかわしてみる。普通、相談されると一般的に上司はなんとか役にたちたいと思ってしまうから、先程の怒りは忘れて、関係は良好に戻ってしまうのである。

このようにして、ウソつきは逆境のなかで鍛えられ、成長していくのである。ちょっとおっかないって？ まあ仕事、休んで活動してても社会的害毒をまき散らさなければ許されるウソは数多くあると思うし、私のような元来の怠け者は、今でもスキあらば休みたいのだ。そのためウソを一日一回必ずつくトレーニングをかかさないようにして、テクニックがなまらないよう努力してるんです。(これもウ・ソ・)

さて、皆さんの中でも心当たりのある方が一杯いるのではないだろうか。胸に手を当てて反省してみよう。これでもか、これでもか、と無数についたウソたちが飛び出してきて、とてもじゃないけどひとつひとつ思いだせないに違いないほどの分量になるであろう。私はついた数々のウソを反省する懺悔コーナーを左翼の業界にも導入しようと考えたのだが、量はあっても懺悔したい人はひとりもいないんじゃないか、ということに公表する前に気づき、思いとどまった次第である。左翼をウソのないクリーンな業界に変革しようとする私の計画の一部は、実行する前に破綻し、かくしてまだウソから足を洗えず、仲良くしている私である。

左翼のつくウソに集会の人数の偽りがあげられる。そのウソは各セクトによって異なり、しかし、必ず、多く語るというところで一致している。最も誤差の多く、ウソを語るころはカクマルで、次に中核派という順位であろう。プントの人たちはそこまでのウソには、彼らの良心が責めたてるのか、わずかな程度である。しかし、実数をいくら偽ったところで、公安デカはゴロゴロ来るわ、各セクトのレポも来るわで、隠すべきところに、すべてバレているのだから、けなげな庶民を欺いていると言える。しかし、最も欺いているのは、自分たちに対してなのだろう。例えば、千人集まった集会で、「一万人の人民決起を勝ち取り、我々は勝利した」と語れば、がんばった甲斐があったと思ってしまうのは、単純な脳細胞の持ち主である私だけであろうか。「本日の集会は、たった千人しか集まらなかった。しかし、その内容と熱意は百万人の集会に匹敵する大勝利であった。」と人数を正直に語ってもそのウソくさはシラけた人のみぞ、感じ取るものである。しかし、つくる側にまわれば、どんな小さな集会であろうとも努力してつくりあげたものであるから、絶対に成果を確認したいものなのである。だからウソをつくことにより、元気になるのは自分自身であり、人はそうやって自分をゴマカシて、やっとなんぼれるしょ

うもない生き物なのかもしれない。

こうして左翼業界で身につけたウソつきの実力を、現在の職業である医療業界においても、思う存分に発揮することに成功している。医療というとなにかしら白衣の天使を思い浮かべ、清純と正直が似合う世界を思い浮かべる人も、多いことと思う。ところがどっこい、ウソがピッタリとした職場であることには驚いた。

例えば、癌の患者さんがいたとする。神経質な患者さんは何度も抗ガン剤を取り出して「これは何の薬ですか。」と聞いてきたりする。普通自分のことをガンだとかわかってる患者はこのような薬局なんかでそんなことを聞き出そうとはしない。ガンかもしれないと疑っているが、しかし、違って欲しいと期待する患者が安心したいために「ただの胃薬ですよ。」と言ってくれるのを待ってたりするのである。医師が患者にどう説明しているのか、わからないため、いつもお茶を濁すのである。「手術をしたんじゃないですか。その傷の治りをよくするお薬です。」と優しく答える。とても穏やかにウソをつき、「副作用はないですか？」と質問されれば、「多少はお薬だから、ありますけど薬をやめればもとにもどりますから」とあいまいに答える。

しかし、これをすべて思った通りに語ったらどうであろう。「ハイ、癌のお薬ですね。あなたの場合、人より量が多いですから、用心したほうがいいですね。えっ、副作用？ 他の薬に比べて重いですね。」などと他の薬との相違点を明らかにしたら、この調子になってしまう。しかし、心理的にはマイナスになってしまうため、患者にこの病気はそのうち治るんだと自覚し、気持ちを楽しんでもらうためにウソは言葉の必需品なのである。商品をそのまま物質としての薬理作用を説明するのが薬剤師ではない。患者さんとの意志疎通をぬきにした説明はありえないからだ。たぶん正直すぎる人間はこのような職場にはむいていないのかもしれない。

とりわけ、精神的病いの患者に対しては、このウソこそが大きな力となる。たとえば週に一回来ている患者がいたとする。もう十年も通っていて薬を飲んでも効かなくなってきているとしよう。そういう人がある時、「今日はあの病院の大先生に見てもらって、一週間も効く注射をしてもらったんですよ。」と晴れ晴れとした顔で話かけてきたりする。そんな時、「そんな先生聞いたことのない名前ですね。新米じゃないですか？ それに注射の体内での持続時間で一日以上有効濃度を示すなんて初耳ですね。本当にそんな薬開発されたんですか？ 先生のハッターですよ。あまりそういう話を真にうけるとバカをみますよ。」などと言ってしまったらアウトである。もうその患者は一生救われず、誰を信じていいのかわからなくなってしまふ。

やはり、そこは知らなくても「ああ・・・先生ですね。この方面においては名医なんですよ。それは運が良かったですね。一週間持つ注射ですか。最近そういうのが、開発されて、よく効くという評判なんです。そのため、なかなか生産がおいつかなくて、手に入らなくなっているようですね。でも、たぶんあの先生のお力で薬が手に入ったのでしょう。注射されたのは、幸運でしたね。きっと運がついてきますよ。」と言っておけば、患者も少しずつ自分の可能性が信じられるようになってくる。だからこの業界では、しっかりとウソをついて、患者に安心してもらう配慮をできるのがプロということになる。

このようにしてウソをつく楽しみに拘泥してしまった私はあっちでウソ、こっちでウソをつき続け、お金を儲けているフトドキな人間なのである。最近の早見さんは観念的である、宗教でもやったら・・・という批判もあるようであるが、この左翼業界で身につけたウソから、現代ではウソを商売にしており、ウソを平気でつく人間はどんな宗教もお断りなようで、絶対に入れてもらえない世界なのである。残念でした。

ところで、一応お断りしておくけれど、ウソつきには、ウソつきなりのルールがあることは忘れてほしくない。そうでないと、ウソの醜態に味をしめて、はまってしまう恐れがあるからである。薬の心理的暗示効果に目をつけた薬剤師のAさんは、小麦粉にパセリや人参などを加え、やれ高血圧の特効薬だとか、よく眠れるだとか、風邪にいい、癌の予防になどとウソをついて商売を始めたのだった。ところが、これがヒットして「治った」だとか「肌のツヤがよくなった」だとか、利用者からの反響がすさまじかった。それが運のツキで誇大広告とかで逮捕されたと言う。

せちがらい世の中なので、くれぐれも逮捕されるような失敗のないやり方にとどめておきましょう。そして人を傷つけるウソでなく、タメになるウソがつけるようになったら、あなたもウソつきのプロの称号が与えられるでしょう。

唯物史観と主体性論・上部構造論

旭 凡太郎

◆「問題の設定」

① 主体性論という場合には、土台にたいする上部構造の位置、あるいは自然発生性にたいする目的意識性、さらには個と全、という問題が微妙にからまっている。

黒田寛一はこの国家とブルジョワ社会、あるいは上部構造と土台という問題について、生産と所有の分裂ということから直接導こうとした。

すなわち「根源的には生産と所有との機械的分離」ゆえに「社会の全体的利害が特殊利害へ分割され」「ブルジョワはその特殊利害をば・・・『共同性の幻想的形態』としてのブルジョワ国家にまで物質化せしめることによって、かれらの生活様式を維持する」と。そして「資本制生産様式における特殊利害と共通利害の分裂の・・・政治形態がブルジョワ国家と市民社会の分裂」であり、「かかる分裂のなかで生活する諸個人は根源的な『種族生活』の成員としての諸個人の否定として、孤立的、利己的人間であり」「市民的人間における政治的生活と私的生活の分裂である」と。

これにたいしてプロレタリアートには独自の位置があるとされる。「プロレタリアートは本質的にブルジョワ社会からしめだされ」「資本制社会における普遍的原理と特殊原理との敵対、自己における全体性と個人性との分裂にたいする物質的直観を基盤として賃労働者はかれらがプロレタリア階級として生み出されたがゆえに、かれらの個人的利害をば階級的全体利害として組織化せざるをえない」それは「人間の普遍的解放という世界史的課題」であり「ブルジョワ国家と市民社会の分裂を克服して人間社会の根源的形態を、自由なる人格の共同体を奪還するための革命的实践である（『プロレタリア的人間の論理』pp. 152～157）」。

このような論理は形をかえてではあれ「ブルジョワアトミズム批判」等荒君達にもひきつがれている（黒田による「物質の自己運動の一契機としての労働」といった考えへの批判というそれ自体としては正しい批判とともに、より観念論的な主客の統一あるいは通俗的な「人間実践の産物としての社会」への一元指向をとまなっ

て）。

しかし現実はいより立体的に分析されねばならないのである。すなわち一定の生産諸力を構成要素とする生産諸関係と、これを精神的ならびに政治的に総括・再生産する諸上部構造・国家、あるいは生産諸関係下の直接的意識すなわち諸自然発生性の目的意識性への転化、さらには価値判断と科学等としてである。

同時に大戦間の非スターリン的マルクス主義、すなわち上部構造の独自の役割を強調した左翼共産主義（ルカーチ、コルシュ）、グラムシ、さらには今日のネオマルクス主義においてもべつのかたちで論じられてきたことにも留意せざるをえないのである。

◆マルクスの場合

② ここで黒田は『ユダヤ人問題によせて』や『ヘーゲル法哲学批判序説』から多く引用しているわけだが、しかしたとえばマルクスは「政治的国家と市民社会の分裂」を「生産と所有の分裂」から導いてはいない。（『ユダヤ人問題によせて』では階級関係について論じていないことは周知の通りである。もちろん『経済学哲学草稿』とセットのものと考えべきであるが、この『経哲草稿』を生産と所有の分裂 — 労働と所有、労働と消費、精神労働と肉体労働の分裂 — にしぼってゆくところに黒田の問題があるということは後述される。）

まずもって政治的解放についてのべているのである。すなわち「財産とか家族とか労働の様式のような市民生活の諸要素は領主権、身分、職業団体といったかたちで国家生活の要素にまでたかめられていた（『ユダヤ人問題によせて』全集1 p. 404）」ことからの市民社会と国家の分離についてのべていたのである。それはこの論文ではまだのべてはいないがある一定の生産諸力、すなわち土地からの分離、人間の産出した労働手段ならびに労働様式、社会的分業、を構成要素とする生産諸関係ぬきには考えられないのである。またこれらを基礎として貨幣、商品、とりわけ資本の価値増殖運動を基軸とする資本主義社会の、人間の意志ないし行動を構成要素としつつこれを支配してゆく資本主義の客観的運動（生産過程ならびに流通総過程）が展開されるわけである。

◆市民社会・国家の分離、から土台・上部構造へ

③ だとするなら、マルクスがこの時期の市民社会・政治的国家の分離のテーマを

そのまま維持しつつ — すなわち所有や家族とか労働の仕方は個人的ないし私的な意味に「低下」し、公民性や政治的精神や意識的活動や公的性格が一般的な機能として分離してゆくことへの批判や、その個人的労働・個人的関係において直接社会的となることを共産主義のモチーフの一環とすること等 — のち『経済学批判序言』で土台・上部構造のテーマへと発展させたことの必然性が理解されるわけである。

すなわち人間はその意志から独立した物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいること、これが実在的土台でありそのうえに一つの法律のおよび政治的上部構造がたち、そしてこの土台に一定の社会的意識諸形態が対応すること、そして社会の物質的生産諸力は既存の生産諸関係と矛盾し、社会革命の時期がはじまること。

経済的生産諸条件における物質的自然科学的に確認できる変革と、人間がこの衝突を意識しそれを闘い抜く場面である法律的・政治的・宗教的・芸術的・哲学的形態とイデオロギー的諸形態を区別すること。

そして人間はつねに自分が解決しうる課題だけを自分に提起すること、ブルジョワ社会の胎内で発展しつつある生産諸力は敵対の解決のための物質的条件をつくりだすこと、したがってこの社会機構をもって人間社会の前史はおわること等である。

すなわちここでは経済的なまたは私的な領域と政治的領域の分離としてとらえられたそれが、同時に人間の意識から独立した物質的諸関係と、そこにおける矛盾を意識しこれをたたかいぬく政治的イデオロギー的場面の分離へと発展させられているわけである。

つまり私的、経済的で、かつ人間の意識から独立した経済的土台・生産諸関係と、そこにおける矛盾を総括し、判断し、イデオロギー、科学、宗教等にまでたかめ、あいたたかってゆく場面が上部構造として設定されてゆくわけである。

もちろんこの生産諸力のなかには生産手段のみならず労働様式、すなわち科学・精神諸力・管理の発達や労働の分化や分業的編成や、全社会的（世界的）分業や、それらの可変性をもふくむのだが。

これにたいし黒田が前記のように「ブルジョワジーはその特殊利害をば『共同性の幻想形態』としてブルジョワ国家において物質化せしめることによってかれの生活様式を維持する」「国家の本質はおのれの階級的利害を貫徹する支配階級の意志を・・実現するための『幻想の共同体』（『社会観の探求』）」という場合には、これら上部構造の独自の意識的あるいは総括的再生産的機能、それらの源泉でもありあるいはそれらの作用場面でもある生産諸関係とその矛盾・対立、ならびにそ

れらの素材的關係にある生産諸力、これらの（拡大）再生産ないし革命、という土台と上部構造の回路は見失われ、「政治」は宗派的道徳的なかたちで登場せざるをえないわけである。

そしてまた前記のごとき「市民的人間における政治的生活と私的生活の分裂にたいするプロレタリアートの個人的利害＝階級的利害＝人間の普遍的解放」といった単純なシェーマは、資本主義的生産様式と諸矛盾、諸自然発生性、これにたいする国家の意識的・総括的機能、これにたいするプロレタリアートの側からの意識的・総括的活動という場面を見失わせることになるわけである。

注) それは彼が、プロレタリアートの「意志」「自覚の論理」を、生産様式・国家への批判から得るのではなく、生産と所有の統一（種族生活）と分離というモチーフを先験的に固定化したうえでその例証として資本主義批判をおこない導きだしている結果である。しかもそのアイデンティティを原始的蓄積過程、原始共同体、さらには生産の原因をなす物質（自然、大地）の自己運動への回帰という神話（梯哲学）のなかにみい出しているのである。

◆資本主義における上部構造と国家

④ すなわち資本主義における国家という場合には、公的機能と公的武装力をことごとく集中しているということが中心にあり、それが法律的・政治的・宗教的・芸術的・科学的・文化的といった生産力・生産関係の総括・再生産にむけた意識的諸形態、諸上部構造の中核的存在ともなり、その階級支配の道具という性格を資本蓄積の道具という機能の下に位置づけてゆくわけである。

したがって労働力再生産・差別の再生産（民族抑圧はもちろん）という機能をも、生産過程とともにになってゆくわけである。

だからプロレタリア階級は、資本主義的生産様式への批判を、その矛盾の意識的・総括的機構としてある国家・諸上部構造への批判と結びつけることによってのみ意識的階級へと転化することが可能なわけであるし、これらのことは人間の意識的行為なり主体的行為なりを考えるための前提条件である。

このことは、前記黒田のように政治的国家と市民社会の分裂を生産と所有の分裂という歴史貫通的観点からとらえるのではなく、マルクスのようにとりあえず所有や労働や家族とかが非国家的・非政治的な、すなわち私的・個人的領域に転化することから導くことが必要なのである。それは既述のごとく一定の生産力を、すなわち土地からの分離、人間の産出した労働手段・労働様式、社会的分業、諸科学をふ

くんだそれを前提するわけである。(さらに商品、貨幣、資本といった生産諸関係もこれを前提とするわけである)。

というのは封建制という場合には、主要な生産手段を人間の生産したものでない土地とすること(手工業、ギルド等あるが)によって、自然の支配、共同体という枠組みが存在し、領主といえども完全な私有、売買関係のうえにないということである。このことによって領主の支配権は軍事的であるのみならず、土地や自然の優位のもとでの労働編成や、血族、家系、それとむすびついた宗教・イデオロギーとむすびついたのである。従ってその身分においては、国家的・政治的従属・支配序列と私的な労働・財産・家族の序列がむすびつきそれぞれ自足的閉鎖的生活圏として存在し、他方領主は三権(行政・立法・司法)やイデオロギー支配を独占するとともにその私的領域(世襲・家族・一族)とも未分化なものとしたわけである。

生産手段の重心が人間の産出した労働手段へと移行し、したがって労働編成もそのようなものへと移行し、社会的分業が発達することによってはじめて生産手段は完全に私有財産のもとにおかれ、労働手段と労働力は完全に分離することが可能となった。労働過程、労働力の処分権、労働の結果(生産物、生産手段)は私的(資本家)の領有権となるわけである。(労働力の所有権そのものは労働者のもとへおかれることによって封建制・奴隷制と区別され、時間決めて労働力を売ることが強いられている)

これらの原因でもあり結果でもあるものとして労働生産物の相互関係を規定する商品・価値・貨幣の運動があり、資本の価値増殖運動があることは周知のとうりだが、国家・上部構造にかんしていうならば、私的過程であるとともに人間の産物でありながら人間の意志から独立しこれを支配する運動過程にある経済過程が政治的国家から完全に分離したわけである。このことによって公的機能(その武装力、執行・行政・徴税、立法、司法)を、中央集権的軍事官僚機構としてことごとく集中してゆくわけである。(封建制では公的武装力は地域・集団ごとに一定の閉鎖性、自足性を有していた)。

そして国家機構の運営(参政権、公民権等)も身分的制約から分離し(土地や家系から)、人格一般という形式へと発展するわけである。同時に、私的ならびに法的運動に転化した運動過程としてある経済過程とその矛盾・諸対立に対し、意識的な、全社会的再生産をも集中し、自己の階級を統一し相手階級を分断・統合し、さらに諸上部構造・諸意識形態の統合環ともなってゆくわけである。たとえば上のごとき労働手段や労働様式の発達、科学や労働者管理を発達させ、精神的活動の領域をもそれらをいわば生産力や労働者支配や労働力再生産との関連で「公的」な

ものへと転化してゆくのである。(いわゆるブルジョワ民主主義、人権という場合には通常国家機構の発動、制御の対象・範囲、にたいする自由、(すなわち法の前の平等というかたちをとった私有財産・労働力の売買・それぞれの処分権を不可侵としたうえでの自由)、ということが論議されるが、このような総括的再生産的活動が根幹なのである。しかも法の前の平等ということじたいが、資本主義生産様式の封建制、さらにはプロレタリアにたいする矛盾の総括の一環なのである)

◆「主体的」と上部構造

⑤ だから「主体的」という場合には、生産と所有の機械的分離にもとづく政治社会と市民社会の分離、個と全の分裂といった静態的なものとしてではなく、プロレタリア・大衆の(「自分」もそこにふくまれている)自然発生性の目的意識性への転化として問題をたてるべきだろう。

それは当該生産様式下発生する矛盾、あるいは階級・階層・諸個人に感知されないし実際に登場している問題を問題として意識し、一面は実践的に、一面理論的に解明してゆくことと同義と考えられる。

この自然発生性という場合には(資本主義的)生産様式の下での生産力発展の抑圧的側面と、可能的側面との表裏一体性においてかんがえられなくてはならない。土地からの分離ならびに資本すなわち人間の産出した労働手段・労働様式のもとの、労働力以外に売るものをもたない階級の登場ということのみならず、機械への従属、科学・管理への従属、過度労働、労働の分化と競争、選別、分割支配、差別と下層労働者化、農業の従属、第三世界労農・先住民従属、過剰生産、戦争等々といったことがある。他方では全成員の科学、管理、分業止揚の可能性、労働日短縮と管理習熟の条件、帝国主義的国際分業の止揚の可能性が意識されてゆかざるをえない。なによりも価値ならびに資本の自律的運動(強制)が人間労働の産物相互の運動であり、また経済過程からの形式的分離と階級支配のもとにあるとはいえない、意識的機能を集中した国家の存在が社会総体と諸個人の変革可能性ということを提起しているといえる。それらは抽象的人権やヒューマンイズムのたえざる基礎となっている。

この自然発生性の目的意識性への転化とはさらに、人々や諸大衆のそれぞれのイデオロギー、実践と行動、意識諸形態、あるいは国家の諸形態、路線、イデオロギーとこれらの相互関係を分析し、同時にこれらの諸形態を導くような回路をもつものとしての諸生産様式とその各構成要素との関連において解明し、かつ当否を判断

し、自己の実践 — 任務なり義務なり — を決定してゆくことでもあるだろう。

この生産様式の各構成要素とは、全体としての生産様式の自律性と強制力の転回点（自己増殖する価値としての資本とか、商品、貨幣とか、労働力の売買の本質と全時間の支配とか資本の回転とか）と、それぞれの運動の素材となる諸生産力—生産手段、産業構成、労働様式と機械への従属、労働の分割、それと労働力再生産、社会的分業あるいは世界市場、農業の従属等々あるわけである。

だから階級とか言う場合には、政治的に意味あるものとしては、これら素材とこのような意味で登場してきているイデオロギー、意識、運動の分析・評価・判断とがセットとならなくては意味がないわけである。

それはプロレタリア階級の現実批判と運動において、直接的生産過程への批判をば同時に流通総過程とのむすびつきへの批判においておこない、さらにこれらを総括するものとしての諸上部構造、イデオロギー、諸階級・階層、国家への理論的実践的闘争とむすびつけることによっておこなうのだ、ということをも意味している。

それはまた今日的闘争の特徴 — それらのどれでもない、各全体と深くむすびついている労働力再生産、差別、農業、第三世界をめぐる闘争をとうして如実にあらわれてきている。

そして「任務」は、あるいは諸自然発生性の目的意識性への転化は、資本制生産様式・国家との直接的闘争に解消されない、あるいはかならずしも直接的には一致しない階級・階層の統一にむけた相互理解と論争をふくめた統一戦線という課題をもふくんでいる。

それは現代帝国主義の下で発達した生産諸力の下で分業と分化を異常な規模で発達させ、それが資本の専制、労働者・農民・民族・被差別階層分断支配の物質的基礎となっていることにも規定されているのである。

◆目的意識と再生産

⑥ いずれにせよそれらは、レーニンが経済主義批判 — 雇主との闘争への限定批判をしながら、国家・専制の具体的あらわれとの闘いをよびかけ、国家・階級の相互関係の宣伝暴露をよびかけ、労働者人民はかならずしも目前の経済的利益から出発しなければたちあがらないわけではないこと、他方社会主義のイデオロギーは労働者の雇主との関係の外部で形成されもちこまれることを強調したことも関連している。

そこにおいては、プロレタリアの自然発生性は雇主との闘争にとどまらず、国家

・上部構造にたいして漠然としたかたちではあれ批判し闘い、あるいはこれによってかわるといふ問題を含んでいるのだということ、あるいはプロレタリアートはすくなくとも問題設定としてはそのような領域に自ら登場したいと望んでいるのだということをも意味している。

他方、多少とも首尾一貫して闘うにあたっての困難が、この直接的生産過程と流通総過程（世界市場）ならびに国家・イデオロギー・諸上部構造・諸階級の連関構造とその現実的重みとしてあり、これの解明をとうした実践・組織・理論が必要であるということをも意味している。

それはブルジョワジーもまた、生産様式の諸矛盾あるいは諸自然発生性をイデオロギー的にも総括し、さらに実践的に総括（国家）しているのだということでもある。

ブルジョワジーが自然発生性を総括するとは、単にブルジョワジー相互の経済的対立を統一するというのではなく、プロレタリアートが提起している問題を含めて判断し統一しているということである。実践的にはブルジョワ民主主義＝公的機能の中央集権的軍事官僚機構による独占によって（公民権、法の前の平等という形式のもと）、私的ならびに自律的運動体である資本主義の矛盾を総括・解決すること、生産様式・生産力の拡大再生産すなわち国家・社会の発展如何ということ、これをキーワードとしつつ推進することにほかならない。もちろんそれらは実際には現実の運動への戦術的判断を媒介とした、鎮圧なり分断（譲歩）とセットとなっているのだが。

それらはたとえば戦争、資本輸出、植民地問題、開発、第三世界の分化、労働者農民の自立、連帯、市場支配（原料、販路、労働力）と帝国主義の市場再分割戦等では自明である。

しかし資本主義にたいする労働問題でもおなじである。そこでは資本の指揮・管理、全時間の支配、資本制的に独自の強制労働といった抽象的なものから、過度労働、生産手段への従属—差別、労働の分割、細分化された労働、精神労働・科学～肉体労働の分離、規律—工場制度、賃金、相対的過剰人口、さらには剰余価値の資本への転化（生産手段と労働力の分離の永遠化）といったこと全体を再生産している。資本主義国家の参与が特別の意味をもつ労働力再生産（福祉、教育等）は以上と密接なものとなっている。

さらに価格メカニズム、通貨・金融・市場・恐慌・産業構成・産業基盤・生産性、貿易・資本輸出、資本・工業への農業の従属等々は直接的なものとしてある。

戦争、軍備拡張、軍事同盟、徴兵あるいは治安・階級対策（鎮圧、分裂、組織化、

規律)・秩序といった国家の独自の領域は、上のような再生産あるいは矛盾の総括・意識化とセットとなっているわけである。

そして家族、差別、民族等資本主義がうみだしたものではないが再生産するそれらは以上のような諸関係のなかに再編成されてゆくわけである。

そして国家権力の運営・出動基準、形式(中央集権的軍事官僚機構、参政権、三権分立、法の支配、徴税等)とこれにたいする運動・戦線・権力奪取にとどまらない民衆の統治への訓練といった民主主義の諸問題が以上の問題全体と密接にいくんでいるのである。

このようにいえば、社会の再生産のみを問題とし、個人を見ていないと批判するかもしれない。

たしかに個人や個性は社会とは異なるのだが、しかしそれとて一定の生産力・生産関係の産物である。既述のごとく人間や社会が可変的なもの、変革可能であるということ一般が土地からの分離、人間の産出した生産手段・労働様式・自律的運動(貨幣・商品・資本)・中央集権国家・土台からの上部構造の分離あるいは意識化・科学の結果である。

またそのなかで、資本制下では逆に分業の固定化と抑圧機構と化しているとはいえ、人間労働の機能転換性や分業の発達や科学の発達が、諸個人をして「変身」可能性への願望や構想や目的意識的思考・実践の可能性を意識させているのだし、諸上部構造の分離と国家の中央集権化とこれとの実践的理論的闘争が、われわれ自身がこれにとってかわること(統治しうる階級化)、さらにその死滅に導くという課題を提起している。

このような諸個人の再生産様式や願望、目的意識は、個性性にもかわり個人固有のものとして社会がとってかわることはできない面があるが、しかしそれらを媒介としてやはり生産様式を総括・判断しているのだ。たとえば宗教のように諸個人の死・それにとともなう死後の世界の想定を媒介としつつそれをおこなっているのだ。

◆エンゲルスの自由論

⑦ だからエンゲルスが「これまでは人間自身の社会的結合が自然と社会におしつけられたものとして人間に対立してきたが、いまや人間自身の自由な行動になる、・・・このとき人間は十分に意識して自分の歴史をつくるようになる(『反デューリング論』)」という表現はスターリン主義的にカリカチュア化された社会主義の必然性(資本主義からの)とか、自由とは必然性の認識、とは全く異なることがわか

る。

それは既述のごとく、直接的生産過程の支配の廃絶(専制・全時間の支配・搾取にとどまらず管理・精神～肉体労働分割・差別労働まで)やブルジョワ独裁国家の解体にとどまらず、直接的生産過程と流通過程、国家-上部構造と土台、の分離ということも止揚しなくてはならないことを意味している。

だからエンゲルスはそのような「人間の自由」についてのべたのと同時に「社会の共同業務(労働の指揮、国務、司法、科学、芸術・・・)」が一部の人々に固定化されてきた歴史からの訣別を主張しているわけである。(『反デューリング論』)

だからプロレタリアートが政治・経済・社会戦線を構築し、国家、資本主義的生産様式(とそのあらわれ)と闘うということが同時に、ブルジョワジーを葬りさりみずからがとってかわることめざすのだとすれば、現在の戦線、諸統一戦線～革命組織の相互関係においてそれが準備されていなくてはならないわけである。つまりマルクスが『哲学の貧困』で「被抑圧階級の解放ということには、必然的にあらたな社会の創造ということがふくまれている・・・」「革命的諸要素の、階級としての組織は、古い社会の胎内に発生しえていた一切の生産諸力の存在を前提する」というとき、このような登場しつつあるプロレタリアの政治的運動を説明しようとしたものであることが推察されるわけである。

◆黒田の資本主義理解

⑧ 黒田が「主体性論争」を国家、あるいは政治的国家と市民社会の分裂と関連づけようとしたこと自体には一定の真理性がふくまれていたと考えられるが、しかしその「生産と所有の機械的分裂」はまさに分析されるべき対象であるにかかわらずステレオタイプ化され、資本主義分析すなわちその運動と構造のなかで位置づけられるべきであるにかかわらず、資本主義を説明する概念に(ついで全歴史を分析する概念にまで)高められてゆくわけである。すべてはその生産と所有の分裂に、その根源的蓄積過程に、原始共同体からの分裂に、さらには自然と人間の分割へと回帰してゆくわけである。

それは社会という概念における、人間の意識から独立しこれを支配する、ということそれ自体を位置づけえないものとする。(ただしそこでの商品・価値・貨幣と資本の価値増殖運動とは独自のものとしてあって、一方が一方へと解消できないのだが)

それはまたこのような生産関係を素材的に構成している生産諸力をも見失うので

ある。このことによって国家・上部構造すなわち生産様式の政治的・精神的総括、再生産の場面としての独自の位置を見失うのである。

それを、彼の

I 「商品」分析、すなわち商品を疎外された労働の対象化、さらには労働力商品化そのものに解消してしまう見解のなかに見る。それは対象化された労働のみを労働の二重性とする見解にもつながる。

II 疎外された労働の結果としての資本という見解の問題点について。あるいは資本制的蓄積の結果としての生産手段・労働力の分離と原始的蓄積の結果としての分離、ということ労働市場を基点とすることによって統一する方法について。

III エンゲルスの社会化された労働、への批判にみる生産力への理解の三点にわたって検討してみよう。

◆黒田の商品・価値理解

⑨ 黒田はマルクスが資本論の冒頭において分析した商品について、「この始元的商品は直接的には物化されたプロレタリアそのもの（『資本論以後百年』p. 78）」であるとし、「資本制生産様式は労働力商品なる商品・・・をその原基形態とし・・・資本制商品は結果的には・・・疎外された労働（賃労働）の対象的形態である。本源的には賃労働者そのもの、その物化形態にはかならない（『マルクス主義の形成の論理』p. 175）」といている。

また労働の二重性について「価値＝交換関係を媒介として商品の実体たる『対象化された労働』がうけとる二つの規定性の問題を、あらかじめ単純商品生産者の生きた労働の二重性としてとらえ、有用労働の対象化によって使用価値が、抽象的人間労働の対象化によって価値が、それぞれ創造されるというようなエッセ主体的解釈（『資本論以後百年』p. 70）」「商品・価値の実体としての労働をば物化された形態においてではなく価値形成の側からとらえるあやまり（『宇野経済学方法論批判』p. 493）」、等主張している。

ここでは、商品・価値ということ資本の運動全体を規定するものとして、又資本の運動の分析の前提条件として独自に考察することの必然性が、彼にとっては全く存在しないことを意味している。説明ずみの「疎外された労働」の例証の一形態にすぎない。

それは商品・価値の分析が価値実現をめぐる問題としてとらえられず、それを労働力商品化をふくめた資本の自己運動（自己増殖する価値ならびに剰余価値の生産

・実現・資本への転化）による労働・人間支配の分析の一環として行おうとしたものであることが理解できない。

だから「物化」「生産物の人間支配」と言いつつもこのような意味においては理解されず、労働力商品化一般以上の意味ではないし、「資本が利潤をうみ、労働者が賃金を、土地が、地代といった三位一体的範式」におわるのだ。

いうまでもなくここでマルクスが対象としたのは、資本制商品生産からの私的、自然発生的な労働の量的質的編成、社会的分業、ということの抽象である（そのかぎり賃労働か否かは捨象されている）。

このような社会では、各私的労働（有用労働ならびに一定時間の労働支出）の全社会的労働の有機的可除部分としての内実性との間には深淵がある。それは労働が同等性・有機的社会性をあらず抽象的人間労働と私的・具体的有用労働に分岐し、さらに交換一般ではなく労働生産物が有機的全社会性を表現する商品（＝貨幣）と、私的ならびに個別的（有用性）である諸商品とに分岐することの真の原因である。

だからマルクスがここで描こうとしたのは商品・価値形態・貨幣と、自然性的私的分業から生まれつつこれらを一貫するこのようなものとしての「同等性ならびに一般的社会的労働」としての抽象的人間労働との関連である。

それはまた同時に資本制の生産と流通をつらぬく価値生産、実現、自己増殖する価値ということの前提でもあり結果でもあるものとした一体に考えることなのである。

もちろん価値増殖は、労働力を売らざるをえない労働者からの労働力の購買によって、労働力の価値生産時間以上の使用によって、本質的には労働過程の支配・労働者の全時間とその結果（生産物）の支配によって可能となる。

それはしかし、価値実現、実現した価値・剰余価値の資本への再投下という運動を前提としかつ結果としているわけである。前提としての労働力を売らざるをえない労働者の存在も、このような剰余価値の生産（生産手段の資本家独占）、再投下、の結果であることもここであきらかになるわけである。

それらは市場とその構成、資本の移動と競争、信用（実現されたが未投下の貨幣資本の社会的集中）、等の運動の起点であるとともに、恐慌、世界市場等併せ労働者はもちろん個々の資本をも渦中に投じつつ、資本の運動法則といったものをつくりだしているわけである。

だから人間がつくりだしながら人間を支配するとか、物化とかいう場合にはこのような資本の運動、その人格化と考えなくてはならないわけである。

◆賃労働と資本の自己同一論

⑩ 黒田が「賃労働と資本とは現実的に対立していながら、資本が賃労働者の『疎外された労働』の集積であるという意味では同一性にある。これをわれわれは『賃労働と資本との矛盾的自己同一』というように表現する。・・これが資本制生産様式の根底によこたわる本質的矛盾」「この本質的矛盾の実現過程が、資本制生産の総過程であり・・（『資本論以後百年』p. 17）」というように、先験的あるいは歴史貫通的疎外された労働（生産と所有、労働と消費、精神労働と肉体労働の分裂）の結果として描き、したがって賃労働支配をば歴史的な資本の運動・支配のもとにあるものとして位置づけたくない、というのは観念論に片足をつっこんだ主体性派固有の性格を如実にしめしている。

そのかぎりにおいては労働力商品化の結果としての資本（主義）という宇野派との親近性を有しているわけである。

もちろん、マルクスが『経哲草稿』で「生産物からの疎外」「労働からの疎外」をいい、あるいは『賃労働と資本』で商品の生産・剰余価値の生産とともに資本関係の生産に言及したように、資本あるいは生産手段と労働の分離を資本の生産過程からの諸結果と考えること自体は当然である。あるいは彼の資本の直接的生産過程分析のキーワードをすらすらしている。

だからかれは機械制大工業・労働様式下での労働支配の全体を絶対的相対的剰余価値生産として分析したわけである。そしてたとえば精神労働・肉体労働の分裂を資本の労働支配が機械制大工業・労働様式の発展をとうして展開してゆくことの一環として分析したわけだが、すでに歴史貫通的に結論をだしてしまった黒田は、それを資本主義的生産様式の一環として分析することができないわけである。

しかしいずれにせよ自己増殖する価値としての資本という運動を前提としても結果としても — 前者は貨幣の資本への転化の問題として、後者は資本の蓄積・回転の問題として — 設定しているわけである。

たしかに黒田も、資本と労働力以外売るものをもたないプロレタリア、という（労働市場での）現実・資本制生産の前提を、資本制生産の結果としてとらえようとしている。ただかれはこの資本制生産の結果たる剰余価値を、その実現・資本への転化の一環としてとらえ、この拡大しつつある生産・流通過程の一環としてとらえる（労働市場もその一環）視野をもたないのである。

かれの「根源的蓄積過程」への思い入れと、その資本制的蓄積過程との二重写しはこのような彼の視野の結果ということが出来る。あるいは生産と所有の分裂の

例証として歴史、資本主義分析があるということがわかる。

「賃労働者の物質的自覚において定立させるのは、それ故資本制蓄積過程の根源的本質的事態としての『根源的蓄積過程』でなければならない。現実の生産過程における剰余労働搾取の直接的原因としての生産手段の蓄積ではなくて、かかる資本蓄積の背後にある根源的原因としての直接的生産者からの生産手段の暴力的収奪の過程でなくてはならない。（『プロレタリア的人間の論理』p. 108）」と。

注） この「根源的蓄積過程」は、単に歴史的所産であるばかりではなく、今日でも第三世界の多国籍企業による農村解体、森林破壊、都市スラム等として再生産されているのであるが、それは資本制蓄積の一環としておこなわれているのである。

その典型とされるイギリスエンクロージャ（囲い込み）もまた羊毛産業資本の発達と羊毛のための農場囲い込み—農民おいだしだったわけである。

◆「社会化された労働」について

⑪ ところで資本による（労働手段、労働対象とともに）労働力使用権の発動としての労働過程、労働力の価値形成以上の労働時間の延長、さらには労働者の全時間の資本のための時間への転化、といった直接的生産過程は、機械制大工業下生産手段・労働様式の発達とこれへの労働者の従属を基礎として発達するのであった。それは機械・労働手段の発達とともに、科学技術の資本力への転化と労働の分化、単純化・差別・競争、機械の主導権化と労働強化、管理支配、相対的過剰人口、等々を発展させるのであった。

これらは社会的ならびに国際的分業（市場）をふくめて資本主義・帝国主義の具体的素材をなし、したがって国家・イデオロギー、自然発生性と目的意識性、判断等の素材的要素をなすのであった。またそれは労働力再生産への資本・国家の介入の基礎でもあった。さらに、一面的には資本主義の残忍な労働者支配の内容をもち、しかしながら社会主義の物質的条件をもちなすのであった。すなわち労働の機能転換性、精神労働・科学・管理の全成員化とそのための労働時間・費用（今日の三次産業、サービス産業はこのことを暗示している）、国際的分業すなわち国際的労農分断克服の条件であるとともに、権力獲得以降もひきつづく課題、差別や民族と分業の連関をも提起しているといえる。

しかし黒田のばあい、生産と所有の分裂（労働と所有、消費、精神労働と肉体労働）等は分析の結果ではなくて、分析の出発点であった。したがって資本主義分析

は労働市場にはじまりまたこれへと結果する生産手段と労働力の分離の生産ということ（資本と労働の矛盾的自己同一）の追認、証明以上の意味をもちえない・（それ以上は根源的蓄積過程に、さらに生産と所有の根源的統一＝原始共産へ、さらに自己運動する物質がその普遍性を人間を介して自覚し主客分裂を止揚することへ、と絶え間なく自然へ回帰する）。だからかれが『空想より科学へ』でのエンゲルスの「社会化された労働」への批判をおこない、エンゲルスには「生産手段のほうがむしろ生産者たちを使用するという、転倒現象の把握はなされていない」と批判しながらも、「生産手段も・・・労働者たちも・・・資本の力によって統合された労働となるのであって（『資本論以後百年』p. 126）」などと小学生にも自明なことのくりかえしにおわったわけである。

というよりここでの論点は当時流布していたスターリン派の「社会化された労働の進歩的役割論」、すなわち結合された共同労働が社会主義の物質的基礎としての進歩的位置にあるといった見解であって、資本主義下賃労働把握においても、プロ独後の管理や分業止揚をめぐる諸矛盾、差別と労働支配ならびに労働の分化の諸関連をとらうとしてもそれらの破産は全面化してゆくわけである。

たしかに時代の制約（『資本論以後百年』は1967年の文章）もあった、すなわち社会主義における管理・分業の問題は中国文革において提起され、反差別運動は1960年代末以降全面化したという面はある。

しかしかれは文革以降も『毛沢東神話の破壊』等で、『経済学教科書』（ソ連共産党）とともに、社会主義以降オートメーション化で労働は技手型技師型労働に均一化されるとか主張していたのである。あるいはソビエトの量質分配論における管理・科学・精神労働の固定化ないし特権化ということそれ自体を問題とせず、労働の異質性（異種産業）と異種性（同一産業内）の論議にすりかえていたのである。

だとすれば、社会主義になんらかのかたちでひきつがれてゆく生産力、すなわちその労働様式や社会的分業下の問題、今日的には資本主義による労働者相互、農民、被差別階層の分断支配を論じる論理構造そのものの不在を判断せざるをえず、それらは「党がただしければプロ独に矛盾はない」とするスターリン派とも通底するわけである。

ちなみにエンゲルスの名誉のために一言いっておけば、彼は同著において「生産手段の方が労働者を使用する」ことの内容として終身の賃労働者化、労働の分野の戦場化、「機械は労働者にたいする資本の最も強力な闘争手段となること」、労働力の乱費、労働機能の諸前提の強奪、労働者とその家族の全生活時間の資本のための時間への転化、一方の過度労働と他方の失業、競争、産業予備軍と過剰人口・

等を展開しているのである。そして現代の生産力の十分な発達、旧来の「もっぱら労働のとりこになっている大多数の人々とならんで直接的生産的労働から解放され・・・社会の共同の用務、すなわち労働の指揮、国務、司法、科学、芸術などに従事する、階級の分化の基礎を解体することを可能にする」等を主張しているのである。（『空想より科学へ』国民文庫pp. 94～110）

たしかにテラー・フォードや差別の分析につらなる労働の分化に力点がおかれているわけではないから、スターリン的に利用される余地がないとはいえないかもしれないが、それぞれ（スターリン派や黒田・・・）の問題であってエンゲルスのあざかり知らぬことなのである。

◆唯物史観の主題

⑫ それゆえかれが、スターリン派は唯物史観を「物質的財貨の生産様式」から出発させることにたいして、「生活の生産」を原理とすることを対置するとき、それは唯物史観のモチーフである土台（生産力とこれを素材とする生産諸関係）とイデオロギー・国家・意識諸形態の関連でもない、あるいは生産様式・階級関係の一形態である分業、その一環としての精神労働・肉体労働の分裂といったことでもない。

抽象的諸個人における生産と所有の分裂と統一の、いわば自己転変の歴史ともいふべきものとならざるをえない。

たとえば「物質的生産諸力に照応して形成される社会的生産関係を経済的土台とする（『社会観の探求』p. 165）」とする一方で、「土台に生産力をふくませるはなりません（p. 171）」「社会的生産関係は・・・経済的土台と上部構造の統一です（p. 166）」というとき、普通の常識とも、マルクスが『経済学批判序言』でのべていることとも著しく異なっているし、述べていることの意味がわかっていないことを意味している。

つまり生産諸力に照応した生産諸関係（生産手段－労働力の結合・編成様式、所有と分配 — 一義的には生産手段の分配 — 、交換）としての土台があり、そこにおける矛盾・対立を意識してたたかいぬくイデオロギー的・政治的・法律的・宗教的・芸術的・哲学的・・・としての上部構造、と考えるのが通常である。

ただしその内容にかんしては論議が存在するのであるが。たとえばわれわれは、スターリン派のように生産力＝生産手段ないし生産における自然と人間の関係、生産関係＝生産における人と人との関係という分離に反対する。

生産諸力には生産手段、精神労働－生産的労働をふくむ労働様式・編成、社会的

分業、科学等がふくまれているとかがえるし、生産諸関係という場合にはその抽象的形態においても(価値・商品・資本)その具体的素材的過程(生産・再生産)においてもそれぞれのレベルでの生産力を前提すると考えている。

イデオロギー、国家、価値判断と科学といった問題においてもここから発生する諸自然発生性、諸矛盾にたいして、「再生産」「ヘゲモニー」「意識性」「公的性格」等を媒介しつつ目的意識性、理念、原理、政策、戦術等をあいたたかわせ、いわば自然発生性の目的意識性への転化、階級の統一、権力問題等を登場させてゆくわけである。

それぬきには決定論的「土台による上部構造の決定」、宿命論的「社会主義の必然性」、宗派主義的先験的階級的立場、党物神と自然発生性への拝跪・・・といった諸結果をまのがれることができないと考える。

だからかれが「社会的生産関係は経済的土台と上部構造の統一です」というとき、善意にみれば、本来的に生産と所有・市民社会と政治的生活の統一が根源的であり両者を統一して「生産関係」と統一したいということであるわけだ。が、しかし既述したように市民社会-政治的国家、上部構造-土台の統一と分離は、生産と所有の分離と統一一般ではない。土地を主要な生産手段とする、すなわち生産と所有の分離と上部構造・政治支配とがかたくむすびついた資本主義以前とは意味がことなる。すなわち土地からの分離という生産力段階、すなわち生産手段の私有制としての発展、生産手段-労働様式の間による産出ならびに私的支配、あるいは私的自然的分業下抽象的人間労働・私的有用労働への分離と商品・貨幣、全体の統一としての自己増殖する価値と労働支配といった土台と、これらの諸矛盾・諸自然発生性を公的・政治的・精神的に総括・意識化・科学化する上部構造・国家の関係なのである。

『経済学批判序言』における土台-上部構造、『ユダヤ人問題によせて』における政治的国家と市民社会の分離、『ドイツイデオロギー』におけるイデオロギー・国家と現実的土台、にせよモチーフは常に一つなのだ。

だからかれは『ドイツイデオロギー』で展開されている三つの契機、「生活の生産は労働における自己の生活の生産も生殖における他人の生活の生産も」「そのまますぐに二重の関係として — 一方では自然的な他方では社会的関係として — あられる。ここに社会的というのは・・・個人の協働という意味である」、の前半の「他人の生活の生産」をもって社会的関係と錯覚してしまうのである。(『マルクス主義の形成の論理』『社会観の探求』)。が、マルクスの云いたかったのはここでの「協働」であり、それが一面的には生産力、他面では生産関係と分化し、さら

にイデオロギー・国家へと発展することであつたらうに。

だとするなら黒田が資本主義の独自の分析をば「テーゼとしては原始共産体」「アンチテーゼとしては社会的分業と私的所有の支配する階級社会、疎外された社会・・・ジンテーゼとして共産主義社会(『資本論以後百年』p. 167)」一般のなかに平板化してしまったり、「社会の自律的原理としての『生産』の面において対象化したのが史的唯物論、・・・商品の面において対象化するとき『資本論』(『プロレタリア的人間の論理』p. 24)」といったかたちで、土台-上部構造をも、上部構造をも平板化し、生産と所有、私・利己と全の統一といった平板なものにおわらざるをえないわけである。

あるいはマルクスが『資本論』の「労働過程」で、単に価値増殖過程と労働過程の統一の契機としてのみでなく、後の相対的剰余価値生産での機械制大工業・労働様式・労働者支配をも念頭においたものとしてのべた労働過程の三諸契機 — 労働手段、労働対象、労働力 — を、それらからきりはなして抽象化して、超歴史的「労働・技術」と称してまとめあげ意味付与したりするわけである(『社会観の探求』、スターリン派にもその傾向はある。金子ハルオ『経済学』等)。

◆アルチュセールの左翼共産主義批判と『経哲草稿』

⑬ これら全体の論議への独自の位置としてマルクスの初期の『経哲草稿』なり『ユダヤ人問題によせて』への評価があるとかがえられる。

ある意味ではそれらは二極化している。

たとえば黒田のごとく、『経哲草稿』の疎外された労働なり「類からの疎外」を諸個人における生産と所有の分裂に部分化させたうえで固定化し、逆にそれを資本主義-歴史分析への基準化させる。

他方でフランスのアルチュセールは「主体としての生産諸関係」を提起する。というより「生産諸関係ならびに政治的・イデオロギー的社会関係の複合体」としてたてるところに特徴がある。そして諸類型をもったものとしての、かつ諸イデオロギー・政治・経済・の複合的統一体としてとらえる。そのうえでルカーチ、コルシユ、グラムシ等をつらぬく「左翼共産主義」来のヒューマンズム、主意主義、上部構造-土台の有機的還元、本質(経済)還元主義を批判するわけである(『資本論を読む』)。

まず黒田の生産と所有の機械的分裂論、すなわち『経哲草稿』での疎外された労働とりわけ類からの疎外をば種族生活からの分離=労働と所有、消費、精神労働・

肉体労働の分裂にきりちぢめてゆく（『プロレタリア的人間の論理』）見解はどうだろうか。

しかしマルクスはこの時点では、疎外された類的生活ということのなかに、自然科学、芸術、政治、宗教、意識と制作活動の二重化（肉体的欲求からの自由等）、のみならず分業、交換、貨幣といったことをもふくませていたのである。さらに『ユダヤ人問題によせて』のそれでは、私的・職業的活動としての市民社会にたいする普遍的・政治的・意識的・公的生活ということをもイメージしていたのである。

それらは今日的にかんがえれば、国家、諸上部構造、貨幣、商品、流通総過程、分業、社会的分業と労働編成、精神活動、科学等の全体とこれら全体への判断、編成、さらには再生産活動をもふくんでいたことがわかる。

ここではなにがないだろうか。それは「資本」である。

資本はここで漠然と想念している「類的生活」から、上部構造と土台を分離するだけではない。ここでの「類的生活」の多くを、すなわち労働の分割や位階位制や科学・管理活動等を資本の価値増殖力に、したがって一面的には再生産的な、他面では抑圧的な力に転化してゆくのだ。それはおなじく分業・交換としての類的生活、すなわち（各）直接的生産過程・全社会的再生産過程（流通・総過程）とを統一してゆく力でもある（同時に流通・総過程に支配されてゆくのだが）。

そしてこれら全体をつらぬく価値の運動、すなわち商品ならびに貨幣、価値の自己運動—自己増殖する価値、剰余価値の生産・実現・資本への転化、としての「剰余価値の生産」と諸個人のこれへの従属であることをマルクスは追及していったわけである。

このようにして『経哲草稿』『ユダヤ人問題によせて』のモチーフはそのまま資本（ならびに国家・上部構造）の分析のうちに内在化されていることがわかる。

と同時に、そのままでは『資本論』で論じられている資本の概念には全くいたらない、ということもわかる。

それはこの時点でスミスを引用しつつ「資本が労働と労働生産物にたいする支配権」であり、「資本とは貯蓄された労働である」等々をみぬき、同時にこれを生産過程の労働者の現実とあわせ、「生産物からの疎外」「労働からの疎外」として提起しつつも、貨幣、精神・科学・芸術・二重活動、分業、交換等の「類からの疎外」の内容展開と合流するにはいたらなかつことに見ることができる。そして後年資本の運動・その力と活動の分析のなかに、またその人間の意識から独立しこれを支配してゆく活動のなかに、それを見い出していったわけである。

だとすれば価値と労働の二重性、直接的生産過程と流過程または剰余価値の資

本への転化の結果としての労働力売買、直接的生産過程下機械制大工業と労働の分割支配、再生産表式・・・etcが比較的同時期、セットになって理解されてゆくことの根拠がわかる。そして類的生活からの疎外どころか、それらが資本、上部構造・国家の労働者・人民への抑圧的力へと転化してゆく構造の解明が課題となっていたことがわかる。

だから労働力の価値が労働の価値ではなく労働力の再生産費であり、資本が手にいれるのは労働力の使用価値であることの強調等の搾取のからくり論（代々木）がピンボケなのは、それが資本の価値増殖運動の解明の一環でしかないこと（資本家が手にいれるのは労働力の処分権であることや、過程と生産物の資本のものへの転化や、全時間の資本への転化や、機械・科学・競争・細分化された労働への従属等）から目をそむけるからだ。

他方商品、労働の二重性、価値形態等で分析された物神的性格、すなわち私的・自然生的分業下労働の同等性ならびに有機的社会的性格としての抽象的人間労働と私的・有用的労働への二重化が、生産物を等価形態（貨幣）と諸商品に分裂させ、前者への生産物の転化（実現）如何を命懸けかつ偶然なものとしてゆく・・といった性格も、それ自体完結しているわけではない。

それらは剰余価値の生産・実現・資本への転化として運動しつつ、かつ全体が流通・総過程を構成し、一面的には拡大再生産を、他面では競争・信用・恐慌・世界市場にいたるものとしての価値の運動と不可分なものとしてあるわけである。

（だから不変資本—可変資本、有機的構成と生産手段—労働編成、有機的構成と市場（二部門分割ならびにC：Vの構成）等が関連性をもつことをもマルクスは展開しているわけである）。

この点は最近普及した「物象化」を論じている人々のなかに、「人と人との関係がものともとの関係になる云々」を、このような資本関係ぬきに貨幣論を媒介に完結させる傾向があることとの関連でかんがえなくてはならないのである。というのは資本は生産関係であってもものではない。資本は生産過程にある資本、貨幣形態にある資本、商品形態にある資本として過程的なものであって、これら全体の分析をとうして、その廃棄すなわちプロレタリア・民衆の自主的・意識的組織・生産をもってとってかわるという課題の内容も提起されてくるのである。

◆ヨーロッパでの論争

⑭ ところで『経哲草稿』なり『ユダヤ人問題によせて』なりを問題とするのは、

単に資本の分析のためではなく、土台にたいする上部構造の関係を問題とするためであった。

周知のごとくこの意識の能動性、この観点からの上部構造・土台の統一をかかげて大戦間に登場したのがコルシュ、ルカーチ等の左翼共産主義であり、グラムシもまたその一環とされる。

アルチュセールは、これと初期マルクス主義・ヒューマニズム派とむすびつけて、第二インター・スターリン派の宿命論、決定論、必然性論に対抗する産物ではあるが、歴史主義、還元主義—経済決定論と批判しているわけだが正しいだろうか。

一面では正しいといえる。

そこでのルカーチの場合には（コルシュも支持している）比較的単純に、商品流通関係や労働の単純化・量化によって物象化されたプロレタリアートの自己分裂から直接的に意識的・過程的实践を導くというシンプルなものであるが、グラムシの場合にもその能動性やヘゲモニーを論じるとき、経済過程との関係において自己矛盾、自己分裂をもっている面がある。

もちろん労働者評議会時代の「工場＝（労働者の）国家」のイメージを原点としつつ、ヘゲモニーの源泉としての労働過程・あるいは労働過程と労働力再生産過程というモチーフを首尾一貫させ、国家権力との対抗関係と相補関係としようとしたことにおいてグラムシの特徴がありわれわれが見過ごすことのできない点ではある。

が、この労働過程の資本主義生産様式ならびに国家のもとでの位置があいまいなままにされているし、また労働過程そのものも抽象的にとらえられている（分業的編成や管理等）。このため知的道徳的ヘゲモニー、上部構造・土台をつらぬく歴史のプロックと経済的土台との関係は直感的にとらえられたままになっていて多面的解釈が可能となっている。

たとえば経済過程からヘゲモニーを導きながら、経済的なもの＝利己的情欲的と規定しその否定としてヘゲモニーを導くとか、自己運動からヘゲモニーをみちびくとか、労働過程（当時はじまったばかりのフォードシステム）の「合理性」への肯定性と否定性、革命における生産と破壊、歴史過程での土台の規定性と限定性（「最終的にのみ決定云々」）、等の両義性がそのまま登場しているといえる。（グラムシ自体の評価は『研究会報』No.4、またはセレクション参照）だからグラムシを単純に決定論とか、主意主義とかいうことはできず、主観、能動性、上部構造、ヘゲモニー等を、経済過程から独自のものとして強調しようとした点で、レーニン主義（その自然発生性と目的意識性、全面的政治暴露、社会主義のイデオロギーの外部からのもちこみ等）の継承という面をも有し、かつロシア革命以降の時代

下苦闘した点に独自性がある（労働過程と労働力再生産、フォードシステムとヘゲモニー等）。

とはいえグラムシが、直接的生産過程から直接ヘゲモニー、労働力再生産、哲学等を論じようとした点では、アルチュセールがいう『経哲草稿』派決定論・ヒューマニズムという側面がある（グラムシがそれを読んでいたかはしらない）。

それは資本の独自の力すなわち流通・総過程（世界市場—帝国主義—戦争とむすびつく）や、その労働過程での専制における管理・分業・分割支配（科学・精神活動・位階位制・細分化された労働・相対的過剰人口）といった問題であり、これらは科学なり目的意識性なり組織と相補関係にたつことぬきには、ヘゲモニー（直接的運動、政策化されるものとしての）で一元化することはできないし、資本主義への全面批判・否定を媒介しなくてはならない。

だから、グラムシは市民社会という語にヘゲモニー、上部構造、とともに生産諸関係の一部（流過程）をもふくませていたとかがえられるふしがあるわけである。

⑮ このようにかれが労働過程を資本主義生産様式全体のうちに位置づけえなかったこと、あるいは資本の専制下での諸労働の編成～分業批判にまでいたらなかったことは、かれが一方で経済過程の否定のうちにヘゲモニーをみようとしたり、他方で上部構造・土台を直結させる、といった両義性のなかにゆれうごいた根拠であった。

しかしいずれにせよ、レーニン流の「自然発生性とこれの目的意識性への転化」ということ以外に土台・上部構造、イデオロギー・国家と生産諸関係、党・大衆、ヘゲモニーの分析の道はないわけである。

そして『ユダヤ人問題によせて』における国家・市民社会の分裂批判、『経哲草稿』における四つの疎外批判（生産物からの、労働からの、類からの、人間からの）と、『資本論』なり『経済学批判序言』での土台・上部構造論との関係をば、自然発生性と目的意識性との関係の一側面とかがえることによって問題を整理しやすくなる。

もちろん初期のこれら論文ですら自然発生性とするには先行説の継承・考証的であるわけだが、初期と後期の断絶—飛躍と共通性の両面をあらわしてはいる。

あるいはプロレタリアートの直接的な存在への批判意識又はブルジョワイデオロギーと混じった意識においてすら、資本や国家の抑圧のあらわれへの反発・批判にとどまらないことを示している。すなわち生産物（生産手段）からの分離、労働

(過程)への支配という問題と「類」としてあらわされるような意識的・社会的・科学的・精神的活動の国家・資本家占有、ないし公的・意識的・矛盾解決ないしブルジョワ社会総括としての国家・上部構造と私的・職業の分離あるいは生産・流通総過程との形式的分離、といった問題をも「問題」として意識し、これと闘いあるいは理論的に解明すべき課題として意識するということである。

このように初期マルクスの論稿を問題設定のそれと考へ、この設定された問題の解明として『資本論』等を考へるなら、認識の問題を「問題意識の革命」として設定しながら(そのかぎり正しい)、その内容にすすまなかつたアルチュセール派との論戦も可能となると考へられる。

すなわち実在の対象と認識の対象(思考による独自の産物とされる)との区別によって経済決定論、認識・科学の起源への還元(土台ないし実践への還元)・素朴反映論を批判しようとする問題である。

かれが実在の対象と区別された認識の対象といつても明確ではなく、先行する諸理論といった意味でもあるが、その真意は「認識の対象=実在の本質」とも言っているように日本のたとえば価値・抽象的人間労働で論議される超感性的存在といった意味だろう。すなわち超感性的なものとしての生産関係、土台-上部構造への認識といったこととかがえられる。

それはやはり実在するのだが実在の仕方が、各種素材・有用性・そこから見た人間、とはことなりそれらを内的または運動過程において支配するという形で存在するのである。

だとするなら生産諸関係、土台-上部構造をめぐる論議は、このような具体的問題設定とはなれたところでは成立しないわけである。

たとえば「マルクスの全体は、その統一性が・・・経済の審級によって最終的に固定される諸々の種別的規定様式(注 政治的・法律的・イデオロギー的・芸術的等の意)にしたがってそれぞれ分節されては、複合的な構造的統一体のなかで共存する、それぞれ異なり『比較的に自律した』諸水準あるいは諸審級とよばれるものを内包した全体の統一性によって構成される。(『資本論を読む』pp. 146~7)」とするとき、経済的土台、そこで登場する問題設定・自然発生性あるいは価値判断と科学・理論・目的意識性・総括、さらにはそのようなものとしての政治・国家・宗教・芸術・・・といったダイナミズムは消え失せる。かわって経済、政治、イデオロギー・・・等の相対的自律性をもった複合体、と経済による最終審級といった平板なものにおわってしまうわけである。

だから「ヒューマニズムが生産関係を単なる人間関係としてあつかうこと」や

「主体と主体の関係に還元すること」をみぬきながら、資本を上へのべた意味で生産関係としては見ていない。すなわち人間の産物でありながら人間の意識から独立して人間を支配してゆく、価値、自己増殖する価値、機械制下諸分業の編成をも専制の武器とする労働過程、諸直接的生産過程と流過程の統一(労働力の売買をふくむ)、としての「資本」がその骨格にすえられていないわけである。

◆日本での論争

⑩ 今日では、グラムシやアルチュセール、プーランツァス等をも経済決定論・階級還元論とする潮流も登場しているのだが、いずれにせよ左翼共産主義、グラムシ、アルチュセール等が、スターリン主義型経済主義的土台・上部構造論、経済決定論(自然成長論・ブルジョワ民主主義)、必然性論にたいして、主体や上部構造の独自性なり、能動性といった点に問題意識があり、一定の現実的基盤を背景にしていた(ルカーチ、コルシュ、グラムシにおけるハンガリー・ドイツ・イタリアの革命的好機とその敗北やフォードシステム、アルチュセール、プーランツァスにおける福祉国家批判等)。

では日本の主体性論争はどうだったろうか。論争の口火をきった梅本克己の場合には、抽象的な「個と類の背反」といった観念論とともに(土台にたいする)上部構造の位置や歴史過程における個人の解明という唯物論的方向性をもっていたとかがえられる(『人間論』『唯物史観と道徳』等)。

では黒田は、といえはこのような通常の流れというより、諸個人における生産と所有の分裂、利己的孤立的人間と種族的人間の円環の固定化というような独特の観念論とその体系化への穴ほりという国際的にも特異な論理構造をかたちづかったわけであるし(梯の物質の自己運動論はその重要なテコとなっているのだが)、その垂流的再編もまた続いていることを考へると、われわれを筆頭に日本階級闘争の未熟な側面を考へざるをえないわけである。

もちろん日本の新左翼運動全体としては、全人民的政治闘争、二重権力・プロ独、資本主義批判・帝国主義批判、党形成・階級形成論等、「主体」の問題を自然発生性と目的意識性、国家との実践的理論的闘争と生産過程・労働力再生産過程での実践的理論的闘争との結合、諸階級・階層(さらには国際的)の統一、社会的結合の主人となることあるいは階級闘争をとうして統治しうる階級へと転化すること等として考へ実践してきたのであるが。

長崎浩『時代経験と思想』

黒田寛一の「技術論」』レジュメ

畑中文治

1 技術的実践と人間的自然

黒田「ヘーゲルとマルクス」の理論的背景と概念的骨格

①技術論論争／武谷：技術的実践

②主体性論争／梅本：自覚あるいは主体性

③自然弁証法の論理的主導説を巡る論争／梯：哲学的概念としての物質

「『ヘーゲルとマルクス』に関する思考が、ほかならぬこの『技術論』を軸になされているという点が特異な点であり、また、黒田の体系に特有のこと」

武谷技術論（技術規定「人間実践（生産的実践）における客観的法則性の意識的適用」）の適用範囲と、戦後的時代背景と論争の中でのその越権沙汰

「黒田にとっては、これは、テクノロジーの領域にとどまるものではなく、むしろ唯物論における実践の本質形態をなす」

「彼の『技術的実践』は目的意識的労働過程の分析にとどまらずに、明らかに『人間主義＝自然主義』的観点からする意義づけが与えられている。」

「テクノロジーの『方法的基礎』たる武谷技術論が、黒田の体系にあってこの人間労働の能産性の高唱につながられている事実こそ、まさしく、時代経験における黒田の思考のイデオロギー的特質をなすのである。テクノロジーと『人間主義＝自然主義』とは一見相容れない立場にもとづくように見えながらも、黒田の体系では、『目的意識的労働実践』の意義という一点に下向することで結び合わされている。」

「黒田の体系ではテクノロギッシュな武谷技術論が、『自然主義＝人間主義』的な人間労働の『本質論』によって意義づけされているということが出来る。ここが黒田の出発点である。それゆえ、黒田のいう技術的実践は、現実の生産諸関係を捨象したレベルでの概念として、いわゆる『疎外』をうけない労働の構造をなすもの

であり、それゆえに、『疎外の諸現象』を展開する『史的唯物論』にとっての『基礎』だといわれるのである。」

2 技術的実践と物質の自覚

「スターリン哲学のこのような体系構成法にたいして、自然の弁証法性は、自然の内容を無限に実現していく目的意識的な技術的実践において、はじめて人間の認識にもたらされるのだと、黒田はいう。」

「原理（始元）としての物質の自己運動によって個々の物（すなわち『人間的自然』と『自然的人間』）を、『自然史の最高の発展段階』として導くという哲学的思惟となれば、もはやマルクス主義が責任を負えるものではあるまい。これは、『物質一般』の存在とそれが『認識可能』だとする断定のあいだによこたわる哲学的難点を、何とか克服しようとする思弁である。」

「けれども、ほかならぬこのような性格の思弁に、ヘーゲル哲学の『概念』を『レーニ的に転倒する』ことによって、黒田はとりくもうとする」。

梯哲学

「『物質の自己運動』と技術的実践を統一する黒田の以上のような論理展開を追ってみると、技術論が、『史的唯物論の基礎』という領域から、さらに弁証法的唯物論の『主体的把握』の分野へまで越境していることは、明瞭に見てとれる。」

認識問題

物質の発生的展開

黒田の人間主義、近代主義 主体性論の根拠

3 技術的実践と主体の決意

「武谷技術論をもって梅本主体性論を切るということの『不充分性』には、たしかに、黒田もまた気づいている。しかしそれは、武谷技術論でいう『意識的適用』ということが、たんに『認識論的』にしか規定されていないせいなのだ、黒田は思う」

「黒田はふたたび『武谷技術論の存在論的基礎づけ』として、かの『物質』との『統一的把握』の問題に還っていく。」

プロレタリアートの歴史的自覚

研究会報 No. 7

発行日 1994年7月 200円
連絡先 ◇東京都豊島区駒込2-8-3 稲山ビル403号 十月社気付
TEL 03-3576-0748
◇東京都新宿北郵便局私書箱2011号 現代思研気付
TEL 03-3485-6736
◇東京都豊島区西池袋2-38-6 第一後藤ビル 豊島文化社気付
TEL 03-3987-7155
◇京都市中京郵便局私書箱101号 創流社気付
